関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

社会的技能研究の統合的アプローチ(I) : SSIの信頼性と妥当性の検討

著者	樋野 潤
雑誌名	関西大学大学院人間科学 : 社会学・心理学研究
巻	31
ページ	1-16
発行年	1988-10-31
その他のタイトル	An Integrated Approach to Social Skills Research (I) : Examination of Consistency and Validity of SSI
URL	http://hdl.handle.net/10112/16435

社会的技能研究の統合的アプローチ(1)
― SSI の信頼性と妥当性の検討 ―

榧　野　　潤

1．はじめに

最近，社会心理学の分野で社会的技能（social skills）の概念が頻繁に使われるようになってきた。しかしながら，社会的技能の概念が指し示す意味については研究者ごとにさまざまであり，一致した見解が得られていない。Riggio, R. E.(1986) はこういった事実をふまえて，従来行われてきた社会的技能の研究の統合を目的とした理論的枠組みを提出し，それに基づいて社会的技能の個人差を測定する Social Skills Inventory（以下 SSI と略記）を開発している。本研究の目的は日本語版 SSI の信頼性と妥当性の検討にある。

社会的技能の定義については多様な主張がなされてきたが，そこには大まかに分けて二つの考え方が見られる。一つは，社会的技能をさまざまな対人行動に潜在的に作用する能力とする考え方である。いま一つは，多様な対人行動の特定の目標や状況に限定された具体的行動としてみていく考え方である。社会的技能をさまざまな対人行動に潜在的に作用する能力とする考え方は，Thorndike, E. L.(1920) に代表される社会的知能（social intelligence）の研究に端を発する。社会的知能とは知能の一種であり，人を理解し他人とうまく協力し合う能力のことである。また，Libert, J. W. and Lewinsohn, P. M.(1973) は，社会的技能を学習理論的な立場からとらえている。つまり，社会的技能とは他者からポジティブに強化された行動を積極的にとり，他者からネガティブに強化された行動をとらないようにする個人の能力としてとらえているのである。ここには社会的技能をいかなる状況においても機能する普遍的で一般的な個体的要因としてとらえようとする傾向がみられる。

これに対して，最近では社会的技能を多様な対人行動の特定の目標や状況に

限定された具体的行動としてみていく考え方が主流となってきている。Hersen, M. and Bellack, A. S.(1976) は，社会的技能を普遍的で一般的な変数としてとらえるのではなく，状況に応じて機能の仕方が異なるものとしてとらえた方が有効であると考えている。彼らは社会的状況において対人行動が効果を持つか否かは相互作用の流れや特定の状況の媒介変数に依存しており，このゆえに社会的技能とは特定の状況や目標においてのみ効果をもつ個別的な行動の複合体であると考えられている。同じく Spence, S. G. and Shepherd, G.(1983) はある観察者が技能のある人とない人とを区別する場合，個人的な要素よりも話の流れや状況に強く依存して判断していると述べ，複数の社会的技能の共通して存在するかも知れない個体差が重要となる状況もあるかもしれないが，それらの重要性は誇張されすぎていると考えている。特に訓練を重視した実践的な社会的技能訓練の研究では，被訓練者にとって困難な特定の状況で有効な行動をとれるように訓練することを主要な目的としている（Argyle, M., 1981)。

しかしながら，先の二つの社会的技能の定義のうち，後者では，研究者の関心によってあまりにも多様な社会的技能がとりあげられ，従来理論的には統一されていなかった。その結果，社会的技能訓練の研究において個々の方法論やテクニックの有効性を比較検討する共通の比較基準が存在しなかった（Ladd, G. W. and Mize, J., 1983)。

より効果的な社会的技能訓練を開発するためには，統一的な枠組みに基づいて，実際の相互作用で社会的技能を評価する基準を明確にする必要があろう。そのうえで，その評価基準にもとづいて多様な社会的技能訓練の方法論やテクニックを比較検討することが必要である。そのためには研究者の関心によって異なってとりあげられてきた社会的技能の研究にみられる理論的混乱を解消して，統一的な理論的枠組みを構築する必要があると思われる。

2．SSI の考え方

そこで初めての試みとして，Riggio(1986) は，社会的技能の研究において統一的な理論的枠組みを提出している。彼は，社会的技能を一般的な能力として考えているが，単一の視点からとらえられるものではないと考えている。彼は従来の研究には一貫性が存在することを指摘している。それは多くの社会的

技能の研究者が，社会的技能をコミュニケーションの観点からとらえているということである。つまり，対人関係における情報のやりとりの過程の中に社会的技能を位置づけようとしてきたのである。そこで彼は，コミュニケーションの観点から研究の枠組みを考えた。この枠組みは，①情報の伝達，②情報の解読，③情報の管理・制御という3つから構成される。その情報はさらに非言語的情報と言語的情報との2つに分けられ，合計6つの基本的な社会的技能を構成する。

個々の基本的な社会的技能について詳しく述べると，まず情緒的表現性(emotional expressivity)，情緒的感受性（emotional sensitivity)，情緒的コントロール（emotional control）の3つの技能が考えられている。これらはそれぞれ非言語的情報の伝達，解読，管理・制御のための技能である。これら非言語的情報によるコミュニケーションは主に情緒と関わるものであるため，情緒的と命名されている。

情緒的表現性は非言語的な情報を媒介として愛情や態度や地位を伝える社会的技能である。この技能は単に姿勢や態度によって情緒状態を表現する能力だけではなく，情緒状態を自発的にしかも正確に非言語的コミュニケーションにおいて表現する能力も含めている。情緒的表現性のすぐれている人は活発で精力的で情緒的であり，他者を情緒的に喚起させたり，勢いづけたりすることができる（Friedman, H. S. and Riggio, R. E., 1981)。

情緒的感受性は主に非言語的情報を媒介として他者の情緒状態や信念や態度や地位（例えば二者の間でどちらが優勢かといったこと）を解読する社会的技能である。情緒的感受性に優れている人は，他者の非言語的で情緒的なしぐさに特に注意をはらう。また，非言語的コミュニケーションにおいて他者の情緒を速く効率的に解読することができるので，他者によって情緒的に喚起されやすい（Friedman, H. S. and Riggio, R. E., 1981)。

情緒的コントロールは非言語的情報を媒介とした表現を制御する社会的技能である。情緒的コントロールに優れている人は情緒状態を隠すことができたり，自発的で極端な情緒の表出を迎えたり，やわらげたりする傾向があると考えられる。

他方，言語的情報の伝達，解読，管理・制御は，非言語的情報の社会的技能

と比べて社会的な側面が強いことからそれぞれ社会的表現性（social expressivity），社会的感受性（social sensitivity），社会的コントロール（social control）と命名されている。

社会的表現性は主に言語的情報を媒介とした表現やその流暢さや会話のきっかけをつくる社会的技能である。社会的表現性の優れている人は他者と会話を始める能力が優れているので社交的で人の集まりを好み，普段から自発的に話をすることができる。

社会的感受性は，主に言語的情報を媒介とした知識や社会的規範を解読する社会的技能である。社会的感受性に優れている人は他者に対して注意をはらい，しかも社会的規範の知識を多く持っているために，自分自身や他者の行動の適切さに強く関心を持つと思われる。また，極端にこういった関心を強く持つ人は，自意識が高く社会的に不安であり，社会的相互作用への参加を嫌うようになるかもしれない。

社会的コントロールは，言語的情報を媒介とした表現を制御する社会的技能である。社会的コントロールに優れている人は機転がきき，自信家である。また，様々な社会的役割を演ずることができ，話し合いの場では特定の立場や方向性を容易にとることができる。

彼によれば社会的技能はこれら6つの基本的な社会的技能をバランスよく獲得することにあるといっている。たとえば，情報の伝達が優れていても情報の管理・制御が劣っている人は，初めのうちは他者から肯定的な評価や反応を受けるかもしれないが，まもなく遠慮のない人として見られるだろう。

この考えにもとづいて彼は社会的技能の個々の基本的な社会的技能を測定するSSIを開発した[注1]。彼は下位尺度ごとの内的一貫性の検討と再検査法の結果，SSIを信頼性の高い尺度として，SSIとパーソナリティー尺度との相関研究の結果から，SSIが妥当性の高い尺度であると報告している。そして彼は個々の下位尺度の得点のバランスが個人の社会的技能を評価する基準と考えている[注2]。しかしながら，SSIにはいくつかの問題点が存在する。それは上で述べた技能間のバランスの問題である。たとえば，6つの技能はそれぞれ完全に独立したものであろうか。いずれか一つの技能が高いことが他の技能を促進したり抑制したりすることはないのだろうか。また，対人関係のあらゆる側面にお

いても一貫して有効な組合せがあるのか，それとも，状況や関係性に応じて有効な組合せの形は変化するのだろうか。これらの問題を解決しない限り，SSIを社会的技能の有効的な指標として用いることはできない。

そこで本論文では，このような問題を解決するための指標として，まずSSIの日本語版の妥当性と信頼性を検討する。次に下位尺度間の相関関係を見ることによって個々の基本的な社会的技能の関係を検討する。最後に社会的技能に見られる性差を検討する。

3．日本語版への標準化の試み

3-1．方法

日本語版への翻訳：SSIは90の項目からなり，個々の項目に記述されたそれぞれのことがらがどの程度，日常とっている行動と当てはまるかを“非常に当てはまる”から“非常に当てはまらない”までの5件法で被験者に聞くものである。翻訳に際しては，常に3人以上で検討し，原文と意味内容ができるだけ同じになるようにした。今回の調査に至るまでに予備調査を試行した。分析には記入漏れを除いた203名をデータとして用いた。その結果，各項目の平均値が4以上，あるいは1以下で，しかも標準偏差が1以上の項目については回答にかたよりがあるという理由でその訳文を吟味し，表現を改めた。従って，表現の細部に関しては原文と一致しないものもいくつかみられる。

被験者：大学生（男子112名，女子101名）が調査を受け，そのうち男子15名，女子4名のデータが記入漏れのため分析から取り除かれた。

質問紙の構成：使用した質問紙は，SSIと新性格検査（柳井，柏木，国生，1987），年令，性別からなる。新性格検査は130項目からなり，社会的外向性，共感性，進取性，持久性，規律性，自己顕示性，攻撃性，非協調性，劣等感，神経質，抑鬱性の12の性格特性を測定するものである。

手続き：1987年11月から12月の授業時間に配布し，その場で回答を求め回収した。

3-2．結果と考察

(1)尺度の信頼性

項目に関する検討：SSI の項目の内容と平均，標準偏差，当該項目と下位尺度の合計得点との相関，各下位尺度の得点分布から抽出された上位15％を上位群，下位15％を下位群として抽出した上位・下位群間での当該項目の平均の差の検定を Table 1 に示す。

下位尺度の内的一貫性：下位尺度の α 係数を Table 2 に示す。この表から分かるようにいずれの下位尺度も α 係数が0.70以上あり，尺度の内的一貫性は保たれている。

(2)尺度の妥当性

SSI と新性格検査の相関：SSI と新性格検査の相関を Table 3 に示す。情緒的表現性は社会的外向性，活動性，進取性，自己顕示性，攻撃性と特に高い正の相関を示したことから，情緒的表現性の高い人は積極的な性格の人であると考えられる。これは情緒的表現性の概念と矛盾しないものである。これらの他に情緒的表現性は共感性，神経質と正の相関がみられた。共感性との関係から，他者を情緒的に喚起させる表現能力に優れているためには，他者の情緒状態に共感できることが必要であると考えられる。また，神経質に関しては情緒的表現性の高い人は自己の情緒状態を把握し，正確に表現することに注意するためであると思われる。

情緒的感受性は社会的外向性，活動性，共感性，進取性，持久性，規律性，自己顕示性，攻撃性と正の相関を示した。これらの中で共感性，持久性，規律性は情緒的感受性の概念と矛盾しないものである。これらの他の社会的外向性，活動性，進取性，自己顕示性，攻撃性は情緒的表現性と情緒的感受性の示す正の相関を反映したものかもしれない。つまり，非言語的情報の伝達に優れている人はその解読においても優れているため，情緒的感受性は情緒的表現性と関係する性格特性と有為な相関を示したと思われる。

情緒的コントロールは活動性，持久性と正の相関を示し，攻撃性，非協調性，劣等感，神経質，抑鬱性とは負の相関を示した。これらの結果から，情緒的ントロールの高い人は人間関係の輪を常に考慮に入れながら積極的に行動し

Table 1

SSIの項目の内容と平均、標準偏差、項目ー得点相関、上位下位群間での平均の差

	平均	標準偏差	項目ー得点相関	D
情緒的表現性尺度				
1.私が悲しんだり落ち込んだりしているのを人はあまりわかってくれません。(F)	3.16	1.05	0.15	0.79***
2.私は人一倍早口です。(T)	2.40	1.15	0.25	1.55***
3.私は落ち込むと、まわりの人までも沈んだ気分にさせてしまう傾向があります。(T)	2.86	1.12	0.23	1.29***
4.私は表情に富んだ目をしていると言われます。(T)	2.77	1.25	0.29	1.96***
5.私は他人が近くにいるとたいてい不愉快になります。(T)	4.08	0.95	0.11	0.46
6.私はしばしば大声で笑います。(T)	4.11	1.00	0.52	1.92***
7.私は怒ったり動揺していても、そばの家族や友人に分かってもらいにくいことがあります。(F)	3.13	1.09	0.19	1.10***
8.私の場合、普通感情が顔に出ません。(F)	3.56	1.15	0.54	2.31***
9.私は自分の怒りを表に出すことがほとんどありません。(F)	3.15	1.27	0.46	2.23***
10.友達と話をするとき、私はよく相手の体に触れて自分の友情を表します。(T)	2.42	1.21	0.23	1.45***
11.私は退屈なパーティでも陽気にすることができます。(T)	2.53	1.06	0.18	1.01***
12.私は人から注目の的になるのが嫌いです。(F)	3.54	1.03	0.10	0.71*
13.私は感情や気分をめったに外に出しません。(F)	3.29	1.14	0.49	2.04***
14.私は友人からしゃべり過ぎると言われることがあります。(T)	2.71	1.30	0.42	2.44***
15.私は怒っても決して人を怒鳴りつけたり、叫んだりしません。(F)	2.68	1.32	0.37	2.41***
情緒的感受性尺度				
1.私は人の話の内容だけではなくその人の身振りにも注目します。(T)	3.79	1.04	0.28	1.37***
2.私ほど感受性が高く、理解力のある人はいないと思います。(T)	2.55	0.97	0.31	1.29***
3.パーティなどの人の集まりで、人が私に興味を持つと私はすぐに気づきます。(T)	2.90	1.13	0.24	1.28***
4.私は人の行為の原因を知ることに興味があります。(T)	3.58	1.20	0.20	1.57***
5.私は他人の人との接し方を見て、その人の性格を正確に言い当てることができます。(T)	2.96	1.11	0.47	1.78***

	平均	標準偏差	項目－得点相関	D
6．私は人の本当の感情がわかるので、人が私に感情を隠すことはできません。（T）	2.62	1.01	0.48	1.78***
7．私は初対面の人の性格を正確に判断することができます。（T）	2.45	1.10	0.45	1.92***
8．私は人と一緒にいるだけで、大きな喜びを感じます。（T）	3.05	0.93	0.09	0.50*
9．私は人と会った瞬間に、その人がうそつきかどうかすぐに見抜くことができます。（T）	2.10	0.96	0.51	1.71***
10．私は人から悩みを打ち明けられることが嫌いです。（T）いです。（F）	4.03	0.97	0.22	1.04***
11．私は悲しい映画を見ると泣いてしまうことがあります。（T）	3.86	1.30	0.20	1.51***
12．私は悩んでいる人を励ますために、よくその人に触れたり抱きしめたりすることがあります。（T）	2.39	1.21	0.38	1.98***
13．私はただ人を眺めているだけで、かなりの時間を過ごすことができます。（T）	3.10	1.24	0.10	0.95**
14．人はよく私を感受性があって理解のある人だと言います。（T）	2.86	0.98	0.47	1.73***
15．友人は腹を立てたり、不安になったときには心を沈めるために私に頼ってきます。（T）	2.89	0.92	0.32	1.24***
情緒的コントロール				
1．私はある人が真から嫌いな場合、どんなに隠そうとしても、その人にいつも気づかれてしまいます。（F）	3.13	1.28	0.41	2.04***
2．私は真面目な顔で笑い話をすることが苦手なことがよくあります。（F）	3.00	1.23	0.12	0.96**
3．私が困っているとき、人はいつも私の顔の表情からそれを察してしまいます。（F）	3.01	1.18	0.44	1.86***
4．私は自分の感情を抑えるのがあまりうまくありません。（F）	2.79	1.25	0.60	2.69***
5．私は自分の感情を誰からもわからないように隠すことができます。（T）	2.96	1.27	0.63	2.78***
6．友人が私をいくら笑わせようとしても、私は笑いをこらえることができます。（T）	2.16	1.09	0.25	1.24***
7．私の場合、感情を抑えることが非常に難しいです。（F）	3.07	1.23	0.63	2.65***
8．私は気が動転しているときでさえも、外見を平静に保つことが非常にうまいです。（T）	2.55	1.14	0.65	2.67***

	平均	標準偏差	項目－得点相関	D
9.どんな集団に所属しても、私はいつも自分の考えや行動を集団に合わせることができます。(T)	3.11	1.03	0.13	0.90**
10.私は神経質になっているときでも、人にそれを気づかれないようにするのが非常にうまいです。(T)	2.63	1.12	0.62	2.25***
11.私は本当は楽しくなくても、楽しんでいるかのように見せかけることができます。(T)	3.38	1.09	0.21	1.24***
12.私は非常に強い喜びや悲しみを味わったとき、それを隠すことがめったにできません。(F)	2.39	1.17	0.50	2.04***
13.私は本当は嬉しくても悲しいふりができます。(T)	2.36	0.99	0.33	1.16***
14.どんなに自分の本当の感情を隠そうとしても、私はそれをいつも読まれてしまいます。(F)	3.18	1.04	0.67	2.29***
15.私はいつでもすぐに幸せそうなふりや悲しそうなふりが容易にできます。(T)	2.54	1.03	0.26	1.15***
社会的表現性				
1.私はパーティを開くのが好きです。(T)	2.92	1.22	0.49	2.20***
2.人に私を十分に理解してもらうには、かなりの時間がかかります。(F)	2.36	1.12	0.28	1.35***
3.私は社交的に活動するのが好きです。(T)	3.22	1.15	0.69	2.48***
4.私は大ぜいの人と接する機会のある職業を好みます。(T)	3.39	1.16	0.59	2.28***
5.私は人の集まりがあればいつも参加します。(T)	2.87	1.01	0.45	1.80***
6.初対面の人に対して、私はいつも自分から話しかけます。(T)	3.04	1.22	0.64	2.61***
7.会話を始めるときには、いつも私の方から話し始めます。(T)	2.97	0.98	0.60	1.84***
8.私は話の要点を相手に分からせるために、身振り手振りを多く交えて話すことがよくあります。(T)	3.68	1.10	0.14	0.82**
9.人と議論するときは、ほとんど私がしゃべっています。(T)	2.42	0.90	0.37	1.24***
10.パーティなどの人の集まりで、私はいろいろな人と話をして楽しみます。(T)	3.09	1.07	0.67	2.60***
11.私は人とあまりつきあおうとしません。(F)	3.62	1.13	0.64	2.70***
12.私は大きなパーティに参加したり、見知らぬ人に会ったりするのが楽しいです。(T)	3.14	1.04	0.70	2.28***
13.私は見知らぬ人とは、話しかけられるまで話しをしません。(F)	3.39	1.22	0.53	2.21***
14.私はいつもパーティの中心人物になります。(T)	2.20	0.89	0.61	1.72***

	平均	標準偏差	項目－得点相関	D
15.私はどんな話題でも、何時間も続けて話すことができます。(T)	2.43	1.07	0.43	1.94***
社会的感受性				
1.私は批判されたり、小言を言われたりしてもめったに不愉快になりません。(T)	3.95	1.07	0.37	1.61***
2.私にとってまわりの人は最大の喜びや苦しみのよりどころです。	3.29	1.05	0.11	0.94***
3.重要な討論の場で、私はその場を観察したり、分析したりするよりはむしろその討論に参加したい方です。(F)	3.13	1.13	−0.18	−0.47
4.私はまわりの人々の持つ雰囲気に非常に影響を受けやすいです。(T)	3.76	1.11	0.49	2.01***
5.私はその場にふさわしい言動を自分がしているかどうか気になります。(T)	3.76	1.07	0.53	2.13***
6.私に対して、他の人びとが非常に親しく話しかけてくることがよくあります。(T)	3.29	1.02	0.06	0.55
7.人が私の行為についてどう思おうが、そんなことは私にとって関係ありません。(F)	3.79	1.20	0.58	2.49***
8.私は自分の言ったことを人が誤解しているのではないかと心配することがよくあります。(T)	3.78	1.00	0.47	1.72***
9.私は両親から行儀作法が大事だといつも教えられてきました。(T)	3.62	1.15	0.10	0.85**
10.私は人に微笑まれたり、嫌な顔をされたりすることに強影響されます。(T)	4.07	0.97	0.60	2.00***
11.私は批判にたいへん敏感です。(T)	3.73	1.05	0.42	1.76***
12.私が人に好かれていることは非常に重要なことです。(T)	3.99	1.03	0.74	2.53***
13.私は人から見られていると思うと、とてもあがってしまいます。(T)	3.31	1.14	0.29	1.44***
14.私は自分が人にどんな印象を与えているのか気になることがよくあります。(T)	3.96	1.05	0.72	2.53***
15.私はまわりの人が私のことをどのように考えているのか気になることがよくあります。(T)	3.91	1.12	0.73	2.83***
社会的コントロール				
1.私は若い人や年をとった人、お金持ちや貧乏人などのあらゆるタイプの人とうまくやっていくことができます。(T)	3.09	1.06	0.37	1.47***
2.私は友人グループの中で、代表者になることがよくあります。(T)	2.92	1.11	0.46	2.10***

	平均	標準偏差	項目－得点相関	D
3.私は非常に個人的な（自分のことについて）話しをしているとき、相手を見ることができません。(F)	3.72	1.20	0.36	1.62***
4.私は用意されたスピーチをこなすのはうまくありません。(F)	3.03	1.19	0.37	1.77***
5.たくさんの聴衆の前で話すことは、私にとって非常に難しいです。(F)	2.61	1.24	0.50	2.47***
6.人の中にいると、私は話すことを思いつくのに骨が折れます。(F)	2.85	1.16	0.53	2.23***
7.私はグループで話し合いをするとき、いつもとてもうまく話し合いをリードします。(T)	2.55	0.98	0.54	2.01***
8.私は自分と似ていない人々と一緒にいると、不愉快になることがよくあります。(F)	3.22	1.14	0.34	1.49***
9.私はパーティなどで、雰囲気を盛り上げるのは得意ではありません。(F)	2.72	1.18	0.48	2.25***
10.私は偉い人達が参加しているパーティになかなかなじめません。(F)	2.70	1.05	0.37	1.47***
11.私は生い立ちの違う人と一緒にいると不愉快になることがあります。(F)	3.93	0.93	0.30	1.08***
12.私は見知らぬ人と話し始めたとき、その場にふさわしくないことを言ってしまうことがあります。(F)	3.18	1.04	0.42	1.70***
13.私はグループのリーダーに選ばれることがよくあります。(T)	2.86	1.06	0.40	2.01***
14.私はやっかいな立場に立たされていることがよくあります。(F)	2.71	0.99	0.05	0.44
15.私はどんな状況にも、とても容易に順応できます。(T)	3.22	1.05	0.47	1.89***

*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001　N＝194

注、D：上位群の平均から下位群の平均をひいたもの。T：true　F：false

Table 2
SSIの信頼性と性差

	男性 (n ＝97)		女性 (n ＝97)		全体 (N＝194)			
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	t 値	α 係数
情緒的表現性	45.5	7.3	47.3	7.7	46.4	7.5	1.7	0.70
情緒的感受性	43.5	7.2	46.7	6.8	45.1	7.1	3.2**	0.70
情緒的コントロール	42.8	8.4	41.7	9.8	42.2	9.1	−0.9	0.82
社会的表現性	44.2	10.0	45.3	9.5	44.7	9.8	0.8	0.87
社会的感受性	53.6	8.7	57.1	7.1	55.4	8.1	3.1**	0.79
社会的コントロール	45.3	8.0	45.2	8.7	45.3	8.3	−0.1	0.79
社会的操作性	43.7	6.8	42.8	5.9	43.2	6.4	−1.0	0.60
総合計得点	318.6	30.1	326.1	30.1	322.4	30.3	1.7	—

*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001　N＝194

いく自信家であり，精神的に健康的な人であると考えられる。このことは情緒的コントロールと矛盾しないものである。

社会的表現性は社会的外向性，活動性，共感性，進取性，自己顕示性と正の相関を示し，非協調性，劣等感，神経質，抑鬱性とは負の相関を示した。これらの結果から，社会的表現性の高い人は社交的で精神的に健康な人であると考えられる。このことは社会的表現性の概念と矛盾しないものである。

社会的感受性は共感性，規律性，自己顕示性，攻撃性，劣等感，神経質，抑鬱性との正の相関を示した。これらの結果から，社会的感受性の高い人は自己や他者の行動が対人的なルールからみて適切かどうかに関心があり，精神的に不健康な人であると考えられる。このことは社会的感受性の概念と矛盾しないものである。

社会的コントロールは社会的外向性，活動性，共感性，進取性，持久性，自己顕示性と正の相関を示し，攻撃性，非協調性，劣等感，神経質，抑鬱性とは負の相関を示した。これらの結果から，社会的コントロールの高い人は他者に合せた行動がとれ，社交的な人である。また，積極的に行動し自己を表現して

いく自信家でもあり，精神的に健康な人であると考られる。このことは社会的コントロールの概念と矛盾しないものである。

これらの結果からSSIは信頼性と妥当性がともに高い尺度であることが示された。しかしながら，妥当性の検討に関しては今後の研究で6つの技能が対人関係のいかなる側面と関係があるのかを明らかにしなければならないだろう。

Table 3
SSIとパーソナリティ尺度との相関

	社会的外向性	活動性	共感性	進取性	持久性	規律性	自己顕示性	攻撃性	非協調性	劣等感	神経質	抑鬱性
情緒的表現性	.49***	.31***	.20**	.25***	-.11	.03	.32***	.43***	-.02	.12	.15*	.11
情緒的感受性	.38***	.36***	.48***	.18*	.22**	.23**	.16*	.15*	-.10	-.06	.09	.01
情緒的コントロール	.11	.18*	.07	.04	.21**	.07	.03	-.36***	-.18*	-.30***	-.24***	-.27***
社会的表現性	.81***	.55***	.21**	.26***	.02	.05	.39***	.10	-.26***	-.21**	-.20**	-.30***
社会的感受性	.04	-.02	.28***	.00	-.06	.20**	.22**	.26***	.10	.31***	.54***	.48***
社会的コントロール	.65***	.65***	.20**	.15*	.25***	.11	.22**	-.18*	-.39***	-.40***	-.36***	-.48***
総合計得点	.76***	.61***	.41***	.27***	.16*	.20**	.41***	.10	-.27***	-.18*	-.04***	-.17*

*p＜.05　**p＜.01　***p＜.001　N＝194

(3)下位尺度間の相関

下位尺度間の相関はTable 4に示した。ほとんどの下位尺度が相互に有意な正の相関を示した。Riggio(1986)は，ある基本的な社会的技能に優れていることが，他の基本的な社会的技能を促進すると考えている。たとえば，非言語的な情報を解読することに優れていることはそういった情報をよりうまく表現する能力を促進するのである。しかしながら，情緒的表現性と情緒的コントロールの関係（t＝6.60，df＝194，p＜.001）や社会的感受性と社会的コントロールの関係（t＝3.58，df＝194，p＜.001）や情緒的コントロールと社会的感受性の関係（t＝3.43，df＝194，p＜.001）などは有意に負の相関を示している。こ

れらは社会的感受性と社会的コントロールの関係を除いて Riggio(1986) の結果と一致している。これらのことから，6つの技能はそれぞれ独立した関係ではなく，ある基本的な社会的技能が優れていることが，他の基本的な社会的技能の開発を促進もしくは抑制することが分かった。

Table 4
下位尺度間の相関

	EE	ES	EC	SE	SS	SC	SSI
EE		0.31***	−0.43***	0.53***	0.23**	0.26***	0.54***
ES			0.14*	0.37***	0.21**	0.35***	0.68***
EC				0.02	−0.25***	0.30***	0.27***
SE					0.05	0.66***	0.81***
SS						−0.24***	0.27***
SC							0.72***

*p＜.05 **p＜.01 ***p＜.001 N＝194
注、EE：情緒的表現性 ES：情緒的感受性 EC：情緒的コントロール SE：社会的表現性 SS：社会的感受性 SC：社会的コントロール SSI：下位尺度の総合計得点

(4)社会的技能の性差

各下位尺度および総合計得点の男女差の t 検定は Table 2 に示した。総合計得点において女子の得点が男子よりも有意に高いことを示した（t＝2.15，df＝194，p＜0.05）。特に情緒的感受性（t＝3.20，df＝194，p＜0.01）と社会的感受性（t＝3.14，df＝194，p＜0.01）の各下位尺度において，男子の得点に比べ女子の得点が有意に高かった。これはコミュニケーションにおいて女性の方が男性よりも情報の解読の技能が優れていることを意味しており，これは社会的な常識と一致している。

4．まとめ

本研究ではまず日本語版SSIの信頼性と妥当性を検討した。信頼性についてはSSIの各下位尺度のα係数を算出して内的一貫性を検討した。この結果，SSIは信頼できる尺度であると認められた。妥当性についてはSSIの各下位尺度と新性格検査で測定された性格特性との相関関係を検討した。この相関関係は個々の下位尺度の意味する概念とほぼ矛盾しないものであった。次に下位尺度間の相関関係から，基本的な社会的技能間の関係について検討した。その結果，6つの基本的な社会的技能はそれぞれ独立したものでないことが分かった。つまり，ある基本的な社会的技能に優れていることが，他の基本的な社会的技能の開発を促進もしくは抑制することが分かった。最後に社会的技能の性差を検討した。その結果，女性の方が男性よりも情報の解読の技能が優れていることが分かった。

今回の研究では技能間のバランスについて直接，ふれることはなかった。今後の課題としては対人関係において有効なSSIの組合せを見つけることによって，技能間のバランスを検討していくことである。

付　記

※本論文の作成にあたり，指導教授である廣田君美先生に御指導を賜りました。ここに感謝いたします。

※本研究の分析はSASプログラムを用い，関西大学情報処理センターのFACOM M-380によって行われた。

※本調査を行うに当たって関西大学卒業生の石原智，原照二，吉田哲也3君の協力を得ました。

《注》

（注1）SSIはもともとさきにのべた6つの基本的な社会的技能に社会的操作性（social manipulation）を加えた7つの下位尺度からなる質問紙であった（Riggio, 1986）. Riggio, R. E., Tucker, J. and Throckmorton, B.（1987）の論

文では，社会的操作性を削除しており，SSI は90項目からなる。これは他の6つの基本的な社会的技能が社会的技能研究の統一的な理論的枠組みをもとに提出されたのに対し，社会的操作性はそれらに補足的につけたされたものだったためである。本論文では Riggio ら(1987) の論文の改定版 SSI にもとづいて日本語版を作成した。

（注２） Riggio は個々の下位尺度の得点と下位尺度の総合計得点との間に正の高い相関があることから，下位尺度の総合計得点を一般的な社会的技能の指標として考えている。しかし，Riggio は個人の社会的技能を評価する基準として個々の下位尺度の得点のバランスを最も重要なものとして考えている。

《参考文献》

(1) Argyle, M. (Ed.), 1981, *Social Skills and Work*. London:Methuen.

(2) Friedman, H. S. & Riggio, R. E., 1981, Effects of individual differences in nonverbal expressiveness on transmission of emotion, *Journal of Nonverbal Behavior*, 6, 96-102.

(3) Hersen, M. & Bellack, A. S., 1976, Assesment of Social Skills, In Ciminero, A. R., Calhoun, K. R. & Adams, H. E. (Eds.), *Handbook of Behavioral Assessment*, New York:Wiley.

(4) Ladd, G. W. & Mize, J., 1983, A Cognitive Social Learning Model of Social Skill Training, *Psychological Review*, 90, 2, 127-157.

(5) Libert, J. W. & Lewinsohn, P. M., 1973, Concept of Social Skill with Special Reference to the Behavior of Deppressed Persons, *Journal of Consulting &Clinical Psychology*, 40, 304-312.

(6) Riggio, R. E., 1986, Assessment of Basic Social Skills, *Journal of Personality & Social Psychology*, 51, 649-660.

(7) Riggio, R. E., Tucker, J. & Throckmorton, B., 1988, Social Skills and Deception Ability, *Personality and Social Psychology Bulletin*, 13, 568-577.

(8) Spence, S. G. & Shepherd, G. (Eds.), 1983, *Developments in Social Skills Training*, London:Academic Press.

(9) Thorndike, E. L., 1920, Intelligence & its uses, *Harper's Magazine*, 140, 227-235.

(10) 柳井晴夫，柏木繁男，国生理枝子,1987,プロマックス回転法による新性格検査の作成について(1)，心理学研究，58，158-165.